日本人協力者を招いた日本語活動
—日本語主専攻の学生による観光実習ツアーを例として—

村木佳子

1. はじめに

近年、タイの日本語教育においてビジターセッションやホームステイ、観光実習ツアーなど、学習リソースとして日本人協力者を授業に取り込んだ活動が見られる。また、トムソン・舛見蘇（1999）では海外での日本語教育活動において教師以外の日本人と接することの重要性が指摘されている。本稿は、著者が勤めているシラパコーン大学の日本語主専攻・副専攻4年生後期の選択科目「観光の日本語」の一環として、日本人協力者を招いて実施した「ナコンパトム観光実習ツアー」についての報告である。

2. 「観光の日本語」コースの概要

この科目は、日本語主専攻・副専攻4年生後期の選択科目として開講されている。学習時間は週4コマを16週、1コマは50分である。教師はタイ人と日本人の2人が担当し、タイ人は表現や語いの導入などを週2コマ、日本人は会話練習を週2コマ担当する。また、授業とは別に課外見学や実習が義務づけられており、その費用の補助が学部から受けられるが、その金額は受講者数によって変わってくる。

コースで使用している教科書は、ソーソートーから出版されている『ガイドの日本語1、2』を参考にして作成した自主教材で、その内容は表1のようである。また、課外見学や実習の内容はコース担当教師によってさまざまで、特に大学から決められてはいない。つまり、何をするかは教師しだいである。

表1　シラパコーン大学文学部東洋言語学科『観光日本語』目次

課	目　次	課	目　次
1	添乗員との打ち合わせ	8	タイの食べ物
2	タイの紹介	9	ワットアルン
3	両替とタイのお金	10	病気
4	朝食およびスケジュール案内	11	ワットポー
5	ナコンパトム	12	買い物
6	トラブル処理	13	アユタヤ
7	エメラルド寺院		

3. 日本人協力者を招いた実習ツアーを行うことにした経緯

3.1 昨年度までの実習

著者は2002年度からこの科目を担当しているが、去年までの観光実習は同僚の日本人教師や日本人交換留学生の協力を得て、学外からの協力者なしで行っていた。実習は受講者の希望と人数を考慮し、2002年度はアユタヤ、2003年度と2004年度はサムットプラカーン県にあるムアンボラーンで行った。実習の方法は、事前準備として事前に割り当てられた観光地について調べ、スクリプトを作成し、実習当日は1人ずつガイド役として担当の観光地について日本語で説明し、教師やガイド役ではない学習者が観光客役になるというものであった。受講者は8〜20人だったので、だいたい1人当たり15分から20分程度ガイド役になり、日帰りで実習を行っていた。

3.2 受講者の増加による実習内容変更の必要性

以前からこのコースで日本人協力者を招いて実習ツアーを行いたいと考え、同僚とも相談をしていた。しかし、なかなか実際に動き始めることができなかった主な理由は次の3つである。

1) ナコンパトム県へ来てくれる日本人協力者は得られるのかどうかという不安。
2) 観光学が専門ではない学生に必要な実習なのかどうかという疑問。
3) 受講者数が少ないと補助が少ないため、実習ツアーの運営費が足りないこと。

しかし、今年度は日本人協力者を招いての実習ツアーについて、日本語学科で急速に検討する必要性が出てきた。それは、受講者の急激な増加である。以下は主・副専攻4年生の人数と「観光の日本語」受講者の推移である（表2）。2005年度主専攻の学生のうち4人は現在日本に留学中のため、4年生受講者は34名だが、日本留学を終えて帰国した学生5人（5年生とする）が一緒に受講したため、2005年度の受講者数は39人となっている。

表2　主・副専攻4年生の人数と「観光の日本語」受講者の推移

年度	主	副	受講者
2002	19人	2人	8人 (2人)
2003	27人	3人	20人 (0人)
2004	38人	3人	12人 (0人)
2005	38人	3人	39人 (0人)

(　)内は受講者のうち、副専攻の学生数を表す。

今年度の受講者が増えた原因として考えられるのが、カリキュラム改正に伴う卒業必要単位数の増加である。今年度の4年生から新カリキュラムになっており、それは旧カリキュラムより卒業単位が多く必要なため、主専攻の学生全員が受講したと考えられる。

いずれにしろ、例年通りの日帰り実習では学生1人が10分ガイド役になるだけでも390分、つ

まり6時間半もかかってしまうことになるし、二日間にしたり2〜3のグループにわけて実習を行ったりすることは、担当教師への負担も大きくなる。何かいい案がないものかと頭をひねった時、グループ活動による実習ツアーができるのではないかと考えた。そこで、実習ツアーを行う際にかかる諸費用について同僚や学科長、学部と相談した。その結果、大学側がツアーで使用するバスやワゴン車を提供、燃料費を負担してくれることになり、その他の費用も学部からの補助でまかなえそうだと判断したため、日本人協力者を招いて実習ツアーを行うことにした。

4. 実習ツアーまでの授業と準備

4.1 実習ツアーの企画

このような実習ツアーを企画する時に気をつけることは、学生と日本人協力者双方にとって意義があるものでなければならないという点である。学生が日本人と接することで、自分の日本語に自身を持つ、今後の課題を自分から見つけられるといったような利点は容易に想像できる。しかし、日本人協力者に対してはどうだろうか。教師は協力者を探し日本語母語話者として活動に参加してもらうということに精一杯で、日本人協力者をその場限りの学習リソースとして捉えていないだろうか。日本人協力者が「参加してよかった」「次回もぜひ参加したい」と思えるように、日本人協力者の視点で企画を立てることも重要である。

そう考えると、観光地として有名なバンコク市内やアユタヤで実習を行うより、学生が4年間生活してきたナコンパトムを実習場所とし、日本人にとっても滅多に行けない場所を組み込んだ方がいいだろうと考えた。そこで、ナコンパトムの観光地をいくつか挙げ、学生と話し合いながら最終決定をした。なお、移動手段の確保が難しいナコンパトムで実習を行うため、移動は全員が同じ大学のバスで移動することとし、観光コースは全員同じとした。

1日ナコンパトム観光　ツアーコースの企画

①シラパコーン大学集合　→　②ドーンワーイ市場（ターチン川沿いにある昔ながらの市場）

↓

③プッタモントン（タイで一番高い仏像があるところ）

↓

④プラパトムチェディー（タイ国内で一番大きい仏塔）

↓

⑤サナムチャン宮殿　（ラーマ6世の宮殿）

↓

⑥シラパコーン大学　→　解散

4.2　実習ツアーまでの授業

授業は、タイ人教師は例年どおり表 1 で紹介した教科書を使い、著者の担当する授業は実習ツアーと関連付けて行った。また、大野（2005）はツアーまでの下調べの必要性をあげ、学生自身に事前に下調べをしておくように言うだけでなく、授業の一環として行ってはどうかという提案をしている。そこで、今回のツアーでは 12 月半ばに受講者全員で下見ツアーを行い、1 月末の実習ツアー当日の資料集めの時間とした。著者の授業の流れは表 3 の通りである。

表 3　実習ツアーに関する授業の流れ

週	月　日	学習内容	宿題・課外活動等
1	11 月 3 日	ガイダンス　／　タイの観光地	
2	11 月 10 日	団体旅行　／　ガイドでよく使われる言葉	
3	11 月 17 日	出迎え（空港）	
4	11 月 24 日	バスの中で（日程説明）	【宿】日程説明
5	12 月 1 日	バスの中で（タイの紹介）	→日程説明提出
6	12 月 8 日	バスの中で（ナコンパトムの紹介）	
7	12 月 15 日	両替　／　下見ツアーについて	ツアー案内スクリプト①提出 **◎12/17(土)下見ツアー**
8	12 月 22 日	下見ツアー反省　／　ガイドの言葉を確認	書き直し
9	12 月 29 日	注意事項	ツアー案内スクリプト②提出
10	1 月 5 日	トラブル処理（病気、盗難など）	
11	1 月 12 日	タイ料理	
12	1 月 19 日	タイのおみやげ	パンフレット提出
13	1 月 26 日	見送り	**◎1/28(土)　観光実習ツアー**
14	2 月 2 日	実習ツアーの反省	ツアーのお礼状送付（学生）
15	2 月 9 日	スケジュールの作成	
16	2 月 16 日	ホテル／チケットの予約	

実習のグループは、1 グループ 4 人として全部で 10 のグループにわけた。グループ分けは 4 年生であることや授業外での準備などのために集まりやすいかどうかもあるので、学生の自由にさせた。受講者は 39 人なので、1 つだけ 3 人のグループができた。

4.3　日本人協力者の募集

日本人協力者の多くはバンコクからだろうと予測し、バンコク南バスターミナルからナコンパトム市内までの往復交通費相当（1 人 100 バーツ程度）を大学側で負担しようということになっ

た。そのような予算的な関係もあるが、やはり地方のナコンパトムまで来てくれる方をどのくらい集めることができるのかという心配から、まずは1グループに日本人1人ということで、全部で10人を募集することにした。

募集の案内は締切りを1月頭とし、11月と12月に日本語教師を中心に配布したが、参加を日本語教師に限るものではなく、日本人であればだれでも参加できるものとした。

5. 実習ツアーの実施

5.1 日時と日程

実施日：2006年1月28日（土）9：00～16：00

予定では午後4時にツアー終了の予定だったが、実際には4時45分になった。日程は表4の通りである。

表4 ナコンパトム観光実習ツアーの日程（予定と実際）

予　定	実　際	内　　容
9:00	9:00	シラパコーン大学集合　出発
10:00	10:00	ドーンワーイ市場　到着　→　買い物45分
10:45	10:45	ドーンワーイ市場から遊覧船に乗りターチン川を観光。船の上で昼食。
12:00	12:10	船の観光　終了
12:15	12:25	ドーンワーイ市場　出発
12:40	12:50	プッタモントン　到着　→　観光20分
13:00	13:20	プッタモントン　出発
13:40	13:55	プラパトムチェーディー　到着　→　観光40分
14:10	14:35	プラパトムチェーディー　出発
14:20	14:45	サナムチャン宮殿　到着　→　観光1時間
15:20	15:50	サナムチャン宮殿　出発
15:30	15:55	シラパコーン大学　到着　→　学校案内30分
16:00	16:45	お見送り、解散

5.2 内容と目的

4年生後期選択科目「観光の日本語」授業の一環として、学生がツアーガイドになり日本人にナコンパトムの観光地を案内する。観光客役としての日本人協力者1～2人に対し、学生3～4人（1グループ）がつき、そのグループで1日観光をする。

5.3 目的

「観光の日本語」で学んだ日本語や知識を実際の場面で使う経験をするのが目的である。

5.4 参加者

学生	39 人	（日本語主専攻 4 年生 34 人、5 年生 5 人）
日本人協力者	11 人	（男性 6 人、女性 5 人）
当校教師	2 人	（日本人教師 2 人）

5.5 評価

今回のツアーに関する評価は、提出物（日程説明、スクリプト、パンフレット）と当日の参加によって行い、ツアー中の評価を点数化することはしなかった。その理由として、①教師による評価：全ての学生に目が届かない　②日本人協力者による評価：人によって評価の基準が違い、平等ではない。③学生による評価：人によって評価の基準が違う。ということもあるが、一番大きな理由としては、学生に評価にとらわれず自由に実習ツアーを行ってもらいたかったからである。初めて会う日本人に対し、初めての日本語ガイドを体験するだけでも、学生にとってはかなりのストレスであり、それを達成するだけでも十分評価にあたると考えた。

6. 実習ツアーの反省　―アンケートより―

日本人協力者にはツアー終了後、学生にはツアーが終わった翌週の授業内でアンケートを行った。アンケートは選択式の質問を 5 項目、記述式の質問を 3 項目用意した。

6.1 日本人協力者へのアンケート

6.1.1 選択式の質問

質問項目	満足/とてもよい/分かりやすい	ふつう/まあ分かる	あまり/努力が必要
1.ツアーの満足度は	11 人　(100%)	0 人　(0%)	0 人　(0%)
2.ガイドのツアーの進め方は	10 人　(91%)	1 人　(9%)	0 人　(0%)
3.ガイドの説明は	10 人　(91%)	1 人　(9%)	0 人　(0%)
4.ガイドの対応は	11 人　(100%)	0 人　(0%)	0 人　(0%)
5.ガイドの態度は	10 人　(91%)	1 人　(9%)	0 人　(0%)

6.1.2 記述式の質問

(1) 今回のツアーの中で、学生のよかった点は何でしたか。

(a) がんばっていた点。一生懸命な姿がよかった。

(b) 態度もよく、親切で熱心。

(c) 一生懸命日本語を話そうとしていた姿に好感が持てた。

(d) 自分達の持ち場をしっかり頭の中に入れて、1つずつ丁寧な説明はよかった点の1つだ。

(e) 4人のガイドが常に交代で誰かが案内、その他の話をしてくれていた。

(f) たくさん話しかけてもらい話題が豊富だった。

(g) 4人のガイドが効率よく順番に説明してくれた。積極的にガイドしてくれたので満足。

(h) （ドーンワーイ市場で）船が着くのが遅くなった時、その場で機転を利かせてくれてうれしかった。あれこれ積極的に説明してくれたし、楽しかった。トイレも気遣ってくれてうれしかった。

(i) 本当のツアーに参加している気分だった。説明も分かりやすかった。

(j) 案内の内容そのものも多すぎず、少なすぎずよかった。

(2) もっと努力が必要だと感じた点は、どこでしたか。

(a) 突発的な質問に答えられないことがあったので、準備したことの丸暗記ではなく、自然に対応できるようになるといい。

(b) 日本語表現の細かい点がもう少し。

(c) 一般の日本人の観光ツアーだと、もっといろいろな質問が飛び出すと思う。特に、日本人の習慣や生活規律など時間をかけてゆっくり正しく勉強する事を希望する。

(d) 少し緊張していたようなので、場数を踏めば問題ないだろう。

(e) 恐縮し過ぎなくてもよい。

(f) 恥ずかしがっている部分があった。

(g) あまり話してくれない学生がいた。

(3) ツアー全体についての意見

(a) 日本人に対して学生のほうが多いような気がした。

(b) 日本語の関わりが主目的なら、日本人1人に対し、3名の生徒さんがいいと思う。話したくても他の人が会話していると中に入っていけずモジモジしている状況があったので。

(c) スケジュールはほどよかったと思う。プッタモントンがちょっと急ぎ足だった。

(d) チェディーの見学時間が短かった。

(e) またぜひ参加してみたい。

(f) こういった企画は、ぜひこれからも続けてほしい。とてもいい企画だと思う。

(g) あまり日本人と話す機会がなかったということだったので、もっと学生に機会を作ってあげると学生ももっと楽しく日本語を学べると思った。

6.2 学生へのアンケート

6.2.1 選択式の質問（回答者 38 人/39 人）

質問項目	満足/上手にできた/よくできた	ふつう/まあまあ /できた	あまり/努力が必要
1.ツアーの満足度は	25 人 (65.8%)	12 人 (31.6%)	1 人 (2.6%)
2.ツアーの進め方は	12 人 (31.6%)	25 人 (65.8%)	1 人 (2.6%)
3.お客様への説明は	2 人 (5.2%)	27 人 (71.1%)	9 人 (23.7%)
4.お客様への対応は	11 人 (28.9%)	27 人 (71.1%)	0 人 (0%)
5.お客様にいつも笑顔？	19 人 (50.0%)	16 人 (42.1%)	3 人 (7.9%)

6.2.2 記述式の質問

(1) 今回のツアーの中で、自分がよかった点は何でしたか。

(a) お客様に笑顔で話せた。それに、お客様のテイクケアができたと思う。

(b) お客様に観光地などを説明できた。一人にならないように、よく話をした。

(c) 知らないことでも一生懸命に説明した。

(d) お客様が私の言葉が分からなくても、がんばってゆっくり時間をかけて説明したこと。今回のツアーで自分の日本語はまだ上手ではないが、これからもっと頑張ろうと思う。

(e) 授業の中で、スクリプトにとらわれず話すようにと先生が言っていたのと同じで、用意したとおりに話さなくてもよかった。それで、今回のツアーをうまく進めることができた。

(f) 前より日本語で説明がもっと上手になった。

(g) 最初、お客様と話したときは緊張していた。お客様は友達ではないという考えを持っていたので、今回の観光は楽しくないだろうと思っていたが、どんどん車で話してから仲良くなってきて、お客様が幸せそうな顔をしている姿をみると、私も幸せになった。

(h) お客様の質問に答えることができた。

(2) もっと努力が必要だと感じた点は、どこでしたか。

(a) 決めた時間を守らなければならない。

(b) 敬語をあまり使えなかった。もっと上手に使えたらいいと思う。

(c) 観光地や観光地にあるものについての情報や資料をもっと調べておいたほうがいい。歴史の知識も大切だと思う。その観光地についての知識がたくさんあるほどいい。

(d) 観光地だけでなく、タイのことや身近なことについてもっと知っているべきだ。

(e) お客様に面白いことを話すのを考えておいたほうがいいと思う。

(f) もし、よくニュースを見ていたらもっとよかっただろう。お客様がタイの経済に関することについて聞いてきた時、もっとよく答えられたからだ。今回は、今知っていることを答えただけで、深く詳しいところまで答えられなかった。

(3) ツアー全体について思ったこと

(a) 1日のツアーとしては、場所が多すぎて、それぞれのための時間は短すぎた。観光地の数を減らして、見学の時間を多くしたらいいかもしれない。

(b) もっと時間がほしい。とても急ぎすぎていたようで、かえって疲れてしまった。

(c) 私はガイドの仕事に向いていないかもしれない。

(d) 他のグループのお客様とも知り合いたい。

(e) チームワークが大切なことだとわかった。

(f) 楽しかったので、2日間のツアーのほうがいいと思った。

6.3 アンケートから見えたこと

6.3.1 日本人協力者の人数について

今回の実習ツアーは、当校初めての試みということで4.3、5.4でも述べたとおり11人の日本人に協力してもらった。2人の日本人から学生の数に対して日本人の数が少ないのではないかとの意見をもらった。そのことは著者も感じたことであり、改善策として学生3人のグループにしたり、日本人を1グループ2〜3人にしたりするなどが考えられる。

実は、今回の参加者のうち9人がバンコクからで、大学まで確実に到着できるのか不安だったため、交通費支給に代わって、朝夕ともバンコク市内までの送迎をすることにした。今後、日本人の協力者の数を増やすとなると、どのように来てもらうかということも検討しなおす必要があるだろう。

6.3.2 観光地の数と見学時間について

大学案内を含め、全部で5つの場所を案内するツアーだったが、アンケートでは日本人からも学生からも見学時間が少なかったという意見が多かった。特に学生からは「暑いのに大変」「急いで案内しなければいけない」などといった否定的な意見も見られた。せっかくナコンパトムに来ていただいた日本人に、いろいろなところを見ていただきたいというのがコースを作成した時の著者の考えだったが、ツアーを終えた参加者からこのような意見がある以上、実習ツアーのコースや見学時間を再検討する必要があるだろう。

6.3.3 日本人協力者の参加の意義

ツアーを終えた後、学生から「1日中日本人と日本語で話したのは今日が初めてで、とても楽しかった」という声を聞いた。これを聞いて、これこそが海外での日本人協力者を招いた活動を行う意義だと感じた。実は、このツアーを行う前までは、「観光学が専門ではない学生だから、わざわざ日本人協力者を招いて観光実習ツアーを行わなくてもいいだろう」という考えがあった。しかし、この実習はガイドとしての経験をするというだけでなく、日本人と一緒に一日を行動するという体験、そして自分の日本語の力を試し、再確認するという意義があった。

また、学生のガイドに対する考えにも変化が見られた。昨年度までの学生にツアーの感想を書

かせると、「スクリプトを覚えて上手に言えた」「笑顔で話せた」などといったコメントがほとんどであった。しかし、今回の実習ツアーを終えた学生の感想はそれだけではなかった。観光や歴史への知識の必要性に気づくだけでなく、日本人協力者との会話を通じて、もっと一般的なタイのことや身近なことについて日本人に説明できるだけの知識の必要性に気づいていた。例えば、今までタイの経済について全く興味を持っていなかった学生が、日本人に経済についていろいろな質問を受けたことをきっかけに、タイ社会についてもっと知りたいと感じたことだ。著者が授業の中でタイ経済について質問したとしても、それは授業内のことであり、この日本人協力者ほどの影響力はおそらくないだろう。日本人協力者には日本人教師とは別の役割があるということを再認識した。

7. おわりに

この実習ツアーを行うきっかけになったのは、受講者数の急増とその課外実習に対応する必要性からであった。本来であれば、日本人との接触機会をつくるためや、学生の動機付けになるためなどがきっかけになるのだろうが、今回はそうではなかった。しかし、結果的に受講者の多さを利点にグループ活動を取り入れ、同僚や学部、そして日本人協力者を巻き込んで、有意義な実習ツアーができた。これはこれから社会に出ていく学生にとっての1つの自信になり、また参加した日本人協力者にとっても何か得るものがあったのであれば、幸いである。

参考文献

大野直子(2005)「観光学科3年生の『カンチャナブリ模擬ツアー』実践報告」、『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、国際交流基金バンコク日本文化センター 71-84

トムソン木下千尋・舛見蘇弘美(1999)「海外における日本語教育活動に参加する日本人協力者——その問題点と教師の役割——」、『日本語教育論集　世界の日本語教育』第9号、国際交流基金日本語国際センター 15-28

野坂智恵子(2004)「観光学科4年生の1日ガイド実践報告」、『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第1号、国際交流基金バンコク日本文化センター 143-147

深澤伸子(2005)「タイ国内日本人家庭ホームステイプログラムは関わった人たちにどんな意義があったか—学習者・教師・日本人協力者3者の調査報告—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、国際交流基金バンコク日本文化センター 201-206

吉田直子(2005)「チェンマイ大学ガイド実習『チェンマイ半日ツアー』の試み」、『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、国際交流基金バンコク日本文化センター 85-93